

# 諸外国の緑化事情

●日本データサービス(株) 緑地計画室

室長 <sup>りゅう</sup> 笠 康三郎

## はじめに

ここ5年ほどの間に、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアの3大陸を訪れる機会を得て、特に私の関心事である緑について様々な知見を得ることができました。本誌の貴重なページをお借りして紹介するには、あまりにも散文的ではありますが、ここにそれを紹介させていただくことにします。

## 1 北欧の街路樹について

よく外国のほうが街路樹がいっぱいあって、町に緑があふれているようにいわれますが、それはある意味では正しく、また間違っているといってもよいかもしれません。つまり、街路樹自体の本数は、例えば、札幌の町に比べればどの町も圧倒的に少ない代わりに、一本の木のボリュームは圧倒的に大きく、また植栽の方法もかなり趣が違っているのです。

### 1) 緑のネットワーク

北欧の町並みはいずれも石造りの重々しい重厚な建物が多いことや、にぎやかなネオンや看板がないために落ち着いてはいますが、どうしても殺風景な印象を受けてしまいます。その分、窓辺のウィンドーボックスの真っ赤なゼラニウムがひと際印象的に目に入ったり、ポケットパークのわずかな緑でも効果的に町にうるおいを与える存在となっています。

緑に関して最も強く感じたのは、街路樹のある通りはメインとなる大通りや幹線道路、または緑道など町の骨格を構成する道路に限られ、普通の通りにはほとんど見当たらないことでした。わが国のように、ただでさえ狭い通りに、電柱、交通標



写真1 ストックホルム市内のKarlavägen通り。道路中央にゆったり作られた緑道空間に、2列のリンデンバウムが並んでいる

識、街灯などがひしめき、そのうえ看板や放置自転車等が歩道を占拠してほとんど歩けないような混乱した状態では、街路樹を植えたところで決してうるおいある環境にはなりようありません。

電柱や電線など全く見られない空に向かって伸び伸びと枝を伸ばし、その下に広がるゆったりとした歩行者空間が町中のネットワークを構成しているのです(写真1)。

そんな街路樹は、札幌であれば道庁前のイチヨウや、植物園前のアカナラなどほんのわずかな区間であり、現在の街路構成を変えることは難しいとしても、これからの街路樹のあり方としては、せめて骨格となる街路の緑だけでも大きく育てたいものだと痛感させられました。

### 2) 街路樹の樹種

そんな町中の緑ではありますが、樹種的には日本に比べてかなり単調のようでした。最も多く見られたのが『リンデンバウム』と呼ばれるセイヨウボダイジュやフユボダイジュで、北欧各地のどこの街路樹でも利用されていました。そのほかで

は、ヨーロッパニレ、ナナカマドの仲間（葉は単葉で実は大きく、樹高もはるかに大きいもの）、セイヨウトチノキ、セイヨウトネリコなど、いわば郷土樹種と呼ばれるものが多く、日本ではどこでもみられるイチョウやプラタナス、シダレヤナギなどはほとんど見掛けませんでした。

いずれの樹種にも共通しているのは、それほど手を入れなくても整った樹形をしているため、自然樹形のままのものが多いこと。したがって、すくすくと良く伸びており、樹齢も長いことです。

現在、札幌市内の街路樹の種類は高木だけでも約50種類もあり、少し多すぎることや、やや外来樹種偏重のきらいがあり、永续性や自然樹形の美しさ、管理の手間、地域性などの点では、今後の改善の余地がありそうです。

## 2 町中の花壇について

1990年に大阪で開かれた花と緑の博覧会以降、花を生かしたまちづくりが急速に広まってきており、様々な花壇が作られるようになってきています。折しも第5回花のまちづくりコンクールでも、札幌市豊平区と恵庭市恵み野花づくり愛好会が受賞の榮譽に浴しています。花壇といえば有名な、札幌の大通公園の豪華絢爛な花壇のようなものはさておき、身近な材料をうまく使って生活の中にとけ込み、周囲の景観形成に大きな役割を果たすような素晴らしい花壇が確実に増えてきているように感じられます。

### 1) 花壇材料について

6年ほど前に、大通公園の再整備に合わせて設けられた道路側の細長い花壇の植栽について相談を受けた時、以前から一度使って見たかったゼラニウムを、真っ白なスイートアリッサムの縁取りと共に植えることを提案しました（写真2）。

こうした花壇では、従来からサルビアやペコニア、インパチェンスやフレンチマリーゴールドなど、お定まりの材料しか使われていませんでしたが、冷涼で乾燥した北海道の夏の気候条件下では、本州以南では絶対に使えない種類も夏の花壇で使えることや、花壇材料、鉢花材料などと区別されていた植物の使い方に対する固定観念を打ち破ることの必要性を痛感していたからです。



写真2 大通りに作られたゼラニウムとスイートアリッサムの縁取りの花壇

その年の秋、初めてヨーロッパに行った時に出会った花壇では、ゼラニウムはもちろん、ヘリオトロープやブルーサルビア、マーガレット、フクシアなど、一度は使ってみたかった材料が至る所に植えられており、今まで考えていたことが間違っていなかったと意を強くしたものでした。

このほかにも、葉の色に特徴あるシロタエギクやシルバーサントリナ、ブルーフェスク、赤紫のイレシネ、そして、何と赤ジソやレッドビーツなど、意外な材料がふんだんに花壇で利用されていたのが印象的でした。

今年の夏にオープンした『サッポロさとらんど』のオープニング修景では、木箱に植えた青ジソと赤ジソと黄葉のコリウスを配植したパレット花壇を作って好評を博すことができましたが、高価な材料をふんだんに使うことだけが花壇づくりではないことを少しずつでも広めていきたいものです（写真3）。



写真3 さとらんどセンターの前のシソをアレンジしたパレット花壇



## 2) 花の植え方

北欧やイギリスの花壇で意外に思ったのは、ヘリオトロープやブルーサルビア等のパープル系の花の使い方で、大胆な黄色との組み合わせ、ややどぎつい赤との組み合わせ、上品な白との組み合わせなど、これまでの常識的な組み合わせ方とはかなり違って見えたことでした。最近、ブルーサルビアの良さが認識され、随分と見掛けるようになってきていますが、ロベリアやヘリオトロープ等はまだまだこれからのようです(写真4)。

玄関先のわずかなスペースの花壇や、プランター、ハンギングバスケットなどの植栽も、決して種類だけ植えるのではなく、何種類もの材料が組み合わせられています。どこに行ってもそれらが実にうまく調和しているのには感心させられてしまいました(写真5)。

最近、コンテナ花壇についての手引書がたくさん出回るようになってきてはいますが、実際に



写真4 ロンドンハイドパークの、ヘリオトロープを中心とした花壇



写真5 ロンドンキュー植物園近くの民家のプランター

はなかなか洒落<sup>しゃれ</sup>たものにはお目にかからない所を見ると、やはり生活に根差したデザイン感覚や、小さい頃からの技術の蓄積の少なさなのかと考えさせられてしまいます。

## 3 導入したい緑化植物

外国との人的・物的交流は近年飛躍的に進んできており、外国のものはほとんど何でもすぐに手に入れることができるようになってきましたが、緑化植物の世界ではまだまだ導入されていないものが少なくありません。その中からいくつかの植物を紹介することにしましょう。

### ①セイヨウビヤクシン<sup>としよう</sup>(杜松)

ヘルシンキの郊外の自然林には、シダレカンバやヨーロッパトウヒ、ヨーロッパアカマツ等の見慣れた樹林の中に、転々とセイヨウビヤクシンが生えていました。改良された這性のものはハイビヤクシンの品種としていくつか出回っていますが、原種のすっきりとした樹形は、シャープなニオイヒバといったところで、全道で栽培可能な耐寒性も大きな魅力です(写真6)。

### ②銀葉ヤナギ

北海道でも気候条件の厳しい場所での緑化には大変苦労していますが、そのような場合、まずヤナギで前生林を作ってから、基調樹種を育てる方法が採られます。しかし、そのヤナギそのものが美しく、観賞価値があったらこんなに便利なことはありません。フィンランドでは、そんなヤナギ



写真6 ヘルシンキ郊外の山中のセイヨウビヤクシン



を何種類か見掛けました。葉はいずれも銀色で、刈り込まれたようなこんもりとした樹形のものもありましたが、何とか導入しているいろいろな場所で試してみたいものです。

### ③ほうき立ちイギリスナラ

イギリスナラ（オーク）は、札幌でもよく植えられています。そのほうき立ちのものにはびっくりさせられました。ストックホルムの市庁舎は観光スポットとして人気で、多くの観光客が訪れる所です。建物の横に立っている木はてっきりポプラだと決め付けてしまい、それにしては緑の色が濃いものだなあと思っていたのですが、その後で訪れた公園でふと見上げたところが、何とイギリスナラだったのでびっくりした次第（写真7）。

ゆったりと枝を広げる緑は、狭い都市空間ではむしろ嫌われるご時世。あの自然樹形が売り物のケヤキですら、ほうき立ち性の品種『むさしの1号』に植え替えられてきていることから、ほうき立ちイギリスナラがわが国にもたらされるのも時間の問題でしょうか。

### ④ヒイラギ（ホリー）

北海道への常緑広葉樹の導入は、道南の一部を除いては大変難しく、緑化に携わる者にとっての夢の一つとなっています。しかし、アメリカ中部セントルイスで見掛けたアメリカンホリーや、ヘルシンキ市内にあった低木状のイングリッシュホリーを見ると、決して夢ではないかもしれないと、試してみたくなっていました（写真8）。



写真7 ストックホルム市庁舎脇のポプラそっくりのイギリスナラ



写真8 アメリカセントルイス市内でみかけた常緑のアメリカンホリー

札幌市内でも、条件さえ選べばヒロハノマサキが4 m以上にも育っているところを見ると、地球温暖化に乗じて常緑広葉樹の生育範囲も広がってきているのかも知れません。

### ⑤キングサリ

6月の始め、鮮やかな黄色の花房を下げるキングサリの花をよく見掛けるようになりました。英名ゴールデンチェーンを訳して、きん=ぐさりと名付けられたはずですが、最近の園芸店では『キングサリー』と、すっかり洒落た名前に変身して売られています。

現在、導入されているこの仲間は高さ3～5 m程度の低木性のものだけですが、北欧には、まだまだたくさんの種類があり、10mほどにもなる高木性の種類も植物園に植えられていました。棘の痛いニセアカシアに代わって、街路樹などに植えられる日も遠くないと思います。

まだまだ紹介したい植物はたくさんありますが、字数も尽きてしまいました。ほとんど北欧やイギリスのことに費やしてしまったのは、気候的にも近く、植栽方法・植栽樹種など参考になる点が多かったこともあります。生活と緑との距離がうらやましいくらい身近な関係にあったからだと思えます。

外国に行くと、本当にわが国の『豊かさ』がどんなものかがよく分かります。その国の豊かさのバロメーターとして様々なものが挙げられますが、緑や花の質こそが最も分かりやすいものであるとすれば、私たち緑化に携わる者の責任も大変大きなものであるような気がいたします。